

## 第9回国際シンポジウム

テーマ：「毛沢東主義—半世紀後の視点」

日時：2015年12月12日(土) 13:00～17:00

場所：三田キャンパス 北館ホール

後援：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 地域研究推進センター

使用言語：日本語、中国語、英語（同時通訳）

### 【プログラム】

13:00 開会挨拶

加茂具樹（慶應義塾大学総合政策学部教授）

13:10 基調講演

R. マクファーカー（ハーバード大学教授）

「毛沢東の遺産」

楊継縄（中国現代史研究者）

「文革後中国は如何に毛沢東の“遺産”に対処したか」

<コーヒーブレイク>

14:35 パネルディスカッション

司会：林秀光（慶應義塾大学法学部教授）

報告：董国強（復旦大学歴史学部教授）

「“文化大革命”およびその現実的影響」

大野旭（楊海英）（静岡大学人文社会科学部教授）

「ウランフーと毛沢東の相克——モンゴル人ジェノサイドの理論的背景」

高橋伸夫（慶應義塾大学東アジア研究所所長）

「反革命粛清運動と『1957年体制』の起源」

討論：R. マクファーカー

楊継縄

16:50 閉会挨拶

高橋伸夫

### 【概要】

2016年は、文化大革命（文革）開始から50年、毛沢東の死と文革の終結から40年という節目の年となる。今回のシンポジウムは、毛沢東が文革を開始してからまもなく50年が経過するのを機に、毛沢東主義に関するわれわれの見方を再検討するという趣旨の下に開催された。米国と中国から第一級の研究者を招聘し、基調講演をいただいた。マクファーカー氏は、官僚主義の破壊と

党の権威の失墜という毛沢東の遺産について論じた。楊繼繩氏は、文革から改革開放への移行と、それがもたらした「権力市場経済」体制を論じた。パネルディスカッションでは、3人の報告者がそれぞれ、「政治的曖昧性」の視座から見る文革、ウラーンフーと毛沢東の関係から見た内モンゴル、1950年代半ばの反革命肅清運動について、最新の研究成果を報告した。これに対し討論者やフロアからは、今日の習近平の政権運営と毛沢東のそれとの比較検討、民族自決と大漢族主義の問題などについて提起され、白熱した議論となった。